

〈提 題〉

アウグスティヌスにおける枢要徳

菊地 伸二

はじめに

アウグスティヌスは、古代ギリシアに淵源を有する枢要徳である節制 (temperantia)、勇気 (fortitudo)、正義 (justitia)、賢慮 (prudentia) についてどのように理解していたのであろうか。枢要徳についての言及は、大きく言うならば、初期の作品と後期の作品に集中していると言ってよいであろう¹⁾。初期の著作である『カトリック教会の道德』では、比較的まとまった叙述がなされており、枢要徳についてのアウグスティヌスの理解を知るうえでは重要なテキストである。アウグスティヌスは「徳とは神に対する最高の愛 (amor) に他ならない」と述べており、枢要徳については、「愛そのもののいろいろな異なった affectus によって分けられた名称である」として、節制、勇気、正義、賢慮について各々説明をほどこしている (I,15,25)。この理解は、後期の著作である『神の国』における記述と較べてみると、何らかの変化を認めることができるのであろうか。本稿では、まず『カトリック教会の道德』を中心に考察を進め、次いで『神の国』等において枢要徳についてどのような理解がなされているかをみることにより、アウグスティヌスにおける枢要徳について明らかにしていく。

1 『カトリック教会の道德』における枢要徳

1. 1 初期の著作における枢要徳

『カトリック教会の道德』に先立ち、『アカデミア派駁論』『自由意思論』

1) ここで言う初期、後期という表現は厳密さに欠けたものではあるが、初期とはアウグスティヌスが司祭に叙任されるまでの30代半ばまでの時期、後期とはおよそ50代後半以降の時期として捉えている。

『マニ教徒を反駁する創世記注解』を取り上げる。もっとも初期の著作である『アカデミア派駁論』では、「人間的的事物に関わる本当の知識とは、まさしく、人がそれによって賢慮の光、節制の美しさ、勇気の堅固さ、正義の聖性を知るものである。これらのものこそ、……真にわたしたちのものにあえて言うことのできるものである」(I,7,20)とされている。また『自由意思論』では、善き意志のもつ四つの徳として、賢慮、勇気、節制、正義が紹介され、賢慮とは求むべきものと避けるべきものについての知識であり、勇気とはわたしたちの権能の中にないものの煩わしさや喪失を卑しむことのできる魂の *adfectio* であり、節制とは求めることが恥ずかしいようなものに対する欲求を抑える魂の *adfectio* であり、正義とは各人にその人のものを与える徳である (I,13,27) とされる。さらに『マニ教徒を反駁する創世記注解』では、「エデンから一つの川が流れ出ていた。園を潤し、そこで分かれて、四つの川となっていた」(「創世記」2.10) という箇所をめぐるアレゴリカルな解釈がなされており、四つの部分に分かれる川について、それらは四つの徳、すなわち賢慮、勇気、節制、正義であると (II,10,13)²⁾ 言われる。以上より、『アカデミア派駁論』では徳という言葉はまだ明確には述べられていないが、『自由意思論』と『マニ教徒を反駁する創世記注解』では四つの徳として賢慮、勇気、節制、正義は取り上げられており、アウグスティヌスがこれらを重要な四つの徳として見なしていることはうかがえる。

1. 2 『カトリック教会の道徳』の構成と概要

この作品は、かれがまだ聖職に叙任される前に書かれたものであり、初期の著作として位置づけられる。執筆の動機としては、かれ自身がそのうちに九年間も留まっていたところのマニ教徒が聖書を批判していること、かれらが自らの純潔な生活と異常な禁欲を自慢していることがあげられている (I,1,2)。マニ教徒の偽りの徳に対してカトリック教会の真の徳を提示するなかでアウグスティヌスは枢要徳を取り上げる。『カトリック教会の道徳』の正式な表題は、『カトリック教会の道徳とマニ教徒の道徳』というものであり、二巻から成る本書の第1巻は「カトリック教会の道徳」を

2) ここにみられる聖書のアレゴリカルな解釈は、アンブロシウス、アレクサンドリアのフィロンに遡ることのできるものである。Cf. *Œuvres de saint Augustin* 50, *Sur la Genèse contre les Manichéens*, pp.544-547. Notes complémentaires 19, Les quatre flueves du paradis et les vertus cardinales (2,10,13-14).

扱っており、第2巻が「マニ教徒の道徳」を扱っている。第1巻は二部から構成されており、さらに第1部は二章から、第2部は四章から成り立っている。

第1部では「幸福と愛」について扱われ、1節では、わたしたちはみな幸福な生活を送ることを望んでいることが確認され、幸福な人とはどのような人かが問われる。人が自分の最高の善を望むとともに獲得している人こそが幸福な人であると見なされる。ここで享受するという言葉が用いられ、それは愛するものを所有することと説明され、最高の善を享受することこそが幸福な人と呼ばれる。幸福な人はまた、それよりもすぐれているものが他にないような善、すなわち、わたしたちが最高善と呼んでいるものに達している人とも言われる。続いて、最高善とは何かが問われ、人間とは靈魂と身体から成り立つという議論から、靈魂をもっともよいものとするものこそが人間の最高善と呼ばれるべきであり、それは神にほかならないことが導かれる³⁾。2節では、人間は自らにとって最高善である神をどれほど愛さなければならないかが問題にされ、神を追求することは幸福を望むこと、神を見出すことは幸福そのものであることが言われ、神を追求するとは神を愛することにほかならず、それは「心をつくし、靈魂をつくし、精神をつくして、あなたの主なる神を愛せよ」ということに他ならないと言われる。人間の最高善とはそれに一致する人を完全に幸福にするものに他ならず、そのような善はただ神のみであり、わたしたちがこの神に一致しうるのは、愛 (dilectio)、愛 (amor)、愛 (caritas) のみによるのである⁴⁾。

第2部では「徳と教会」について扱われ、徳についてまず論じられる。ここでいう徳とは節制 (temperantia)、勇気 (fortitudo)、正義 (justitia)、賢慮 (prudencia) を指しているが、「徳とはわたしたちを幸福な生活へ導くものであるから、わたしはあえて徳とは神に対する最高の愛に他ならない」と見なされ、四つの徳は愛という言葉によって説明される。2節では、節制とは「自分の愛するものに自らを全面的に捧げる愛」であり、勇気とは「自分の愛するもののためにすべてのことを進んで耐え忍ぶ愛」であり、正義とは「自分の愛するものだけに奉仕し、そのために正しく支配する愛」であり、賢慮とは「愛にとって有益なものとは有害なものとを明敏によりわけける愛」であると言われる。3節では、神は人間の最高善であり、最高善

3) これと類似した議論は、たとえば、*De beata vita*, 1,7-2.13にもみられる。

4) dilectio, amor, caritas の語義については *De civitate Dei*, XIV,7 を参照のこと。

を求めることはよく生きることであり、よく生きることは心をつくし、靈魂をつくし、精神をつくし、神を愛することである。神に対する愛が無傷に腐敗することなく守られることが節制に属することであり、あらゆる災いにもひるまなくなるのが勇氣に属することであり、他の何ものにも仕えなくなるのが正義に属することであり、誤謬と欺瞞が少しずつ忍び込まないように事物を識別するに際して警戒するのが賢慮に属することである(1,25,46)と言われる。続いて、神を愛することと自分自身を愛すること、隣人を愛することとの関係が問題とされ、アウグスティヌスによれば、神を愛する人だけが自分自身を愛しうるのであり、自分以上に神を愛するとき、正しく自分自身を愛することになる。最後に、「心をつくし、靈魂をつくし、精神をつくしてわたしたちの主なる神を愛する」、「隣人を自分と同じように愛する」、この二つの掟にこそ全律法と預言者とがかかっており、それが教会全体、すなわち、キリスト教信者に与えられた生活の規範であることが確認され、そこにこそカトリック教会の道徳が示される。

1. 3 『カトリック教会の道徳』における枢要徳

アウグスティヌスは、四つの徳がすべての人によってよく知られているものであることを確認しながら、それらの徳が人びとの精神においても存在していると述べる(1,25,46)。徳というものが幸福な生活へと導くものであること、幸福な生活とはわたしたちが愛さなければならない最高善である神を享受することであることへの揺るぎない確信から、徳を愛との関係で捉えようとする。節制とは「自分の愛するものに自らを全面的に捧げる愛」であり、勇氣とは「自分の愛するもののためにすべてのことを進んで耐え忍ぶ愛」であり、正義とは「自分の愛するものだけに奉仕し、そのために正しく支配する愛」であり、賢慮とは「愛にとって有益なものと有害なものとを明敏によりわける愛」であるが、それは四つの愛ではなく、「愛そのもののいろいろな異なった affectus」と位置づける。生活の規範との関係では、節制については「わたしたちを神に結びつける愛を、ある意味で無償に保ち、腐敗しないように守ることをわたしたちに約束するものである」と述べ、「この徳の役目は、欲望—すなわち、神の法とその善性の果実、一言で言えば、幸福な生からわたしたちをそむけることを切望する欲望—を抑制し、しずめることである」(1,19,35)と述べている。勇氣については「あまり多く語る必要がないだろう。わたしたちが語っているこの愛、すなわち、神に対するまったき聖性によって、燃えつつあるべきこ

の愛は、世のものを望まぬときに節制ある愛と呼ばれ、それらのものを捨てるときに勇氣ある愛と呼ばれるからである」(I,22,40)と述べている。正義については「神を愛する人に対してそれは次のような生活の規範を与えている。すなわち、自らの愛する神、最高の善、最高の知恵、最高の平和に対して心から仕え、他のすべてのもの、すでに自らの下にあるものは治め、あるいは治めるように努めるといような規範を与えているのである」(I,24,45)と述べている。賢慮については「あまり長々と論ずるべきではない。欲求すべきものと避けるべきものとを識別することが賢慮の働きに属する」(I,25,46)と述べている。

2. 『神の国』における枢要徳

2. 1 後期の著作における枢要徳

まずは『神の国』以外の著作についてみる。『創世記逐語註解』において枢要徳に関する引用がみられる。その最終巻の第12巻は「創世記」の註解というよりは、パウロが「コリントの信徒への手紙二」12.1-10で述べている「第三の天」について言及されているところであり⁵⁾、それと楽園との関係について述べられているところである。引用されている箇所では、透き通った真理の言い表しがたい視像ともいべき知性的視像が取りあげられており、次のように言われる。「そこでは透き通った真理が物体のいかなる類似物なしに覚知され、真理は偽りの臆見の雲によって曇らされることはなく、魂の徳は骨の折れるものではない。節制の働きによって欲望が抑えられるのでもなく、勇氣の働きによって逆境が耐えられるのでもなく、正義の働きによって不正が罰せられるのでもなく、賢慮の働きによって悪が避けられるのでもない。そこではただ一つの徳は、見るものを愛することであり、最高の幸福は愛するものを所有することである」(XII,26,54)。否定的な表現ではあるが、ここでは魂の徳について節制、勇氣、正義、賢慮の働きについて述べられており、それらの働きが不要となる世界が描かれている。この世での徳の働きの必要性が述べられるとともに、この世では実現することのない最高の幸福について言及されていることに注目する必要がある。

また「エピクロス派とストアの哲学者がパウロと議論しはじめた」という「使徒言行録」17.18-34についての『説教』150において枢要徳につい

5) 執筆年代は414年頃と考えられる。『手紙』159.2を参照のこと。

ての次のような言及がある⁶⁾。「エピクロス派とストアの哲学者は使徒パウロと議論をしながら、わたしたちにその議論を通して、わたしたちが何を拒絶し、何を選ぶべきかを教えてくれている。徳のある魂は非常に価値のあるものである。賢慮は悪いものと善いものとの違いを教えてくれるし、正義はすべてのものにそれ自身の物を適切に分配してくれるし、節制は快樂を抑制してくれるし、勇気は試練に容易に耐えてくれる。それは偉大なものであり、賞賛すべきものである。…しかし教えてほしい。あなたは次のことをどこから得るのか。あなたを幸せにするのは、まさしく徳のある魂ではなく、あなたに徳を与えたお方、あなたにそれを望むように鼓舞したお方、あなたにそれを受け入れる力を与えたお方である」(150,9)。ここでは枢要徳に一定の重要性は与えられているものの、それらの徳が人間を幸福にするわけではなく、むしろ人間に徳を与え、人間を幸福にする存在へと目を向けるように促している。

さらに『詩編講解』83編 8-10節の講解においては、とくに「嘆きの谷にいる」「かれらは多くの力から一つの力へと進んでいく」という言葉をめぐって、枢要徳について次のような言及がなされている。「たしかに、わたしたちの生活において実践する必要のある徳の力は四つある。それは多くの作家によって述べられ、聖書においても見出される。ひとつは賢慮であり、それによって善と悪とを区別する。ひとつは正義と呼ばれているものであり、それによってすべての人には誰も負債なく、すべてを愛しながら、しかるべきものが帰せられる。次に来るのが節制であり、その徳によって身体的な衝動を抑制する。最後に勇気というものがあり、それによってわたしたちはあらゆる悩みに耐えることができる。これらの徳は、今、嘆きの谷にいるわたしたちには与えられているが、そこからわたしたちは一つの徳へと進んでいく。それはどのようなものか。神のみを冥想するという徳である」(83,11)。ここでは、この世における四つの徳のもつ重要性を容認しながらも、それはやがて神を冥想するという一つのことに向かっていくことへと強調点が置かれている。以上より、三つに共通しているのは、四つの徳の重要性を示しながらも、その不十分さ、その不完全さにも強調が置かれているということである。『創世記逐語註解』では、この世では実現することのない最高の幸福について言及がなされ、『説教』150でも、人間を幸福にする存在へと眼差しが向けられ、『詩編講解』で

6) *The Works of Saint Augustine, Sermon, III/5, p.30* によれば、執筆年代は413-4年頃、説教はカルタゴで行われたようである。

も、神を瞑想するという徳について力点が置かれている。

2. 2『神の国』における枢要徳

第4巻は、主として異教徒を批判することにあてられており、異教徒は *virtus* と *fides* を他の徳よりも優先して崇めているが、他の徳についても同様な扱いをするべきではなかったかと問題提起する中で、枢要徳が取り上げられる (IV,20)。第5巻も異教徒を批判することにあてられているが、ここでは人間の最高善は徳であると見なした異教の哲学者が槍玉にあげられており、その中で賢慮、正義、勇気、節制の徳について論じられている (V,20)。第13巻は、神の国と地上の国の二つの国の起源について扱われており、枢要徳について言及されるのは、「創世記」のエデンの園について述べられているところであり、次のように記されている。「このようにして、「樂園」を至福の状態にある者たちの生として、「四つの流れ」を四つの徳、賢慮、勇気、節制、正義として……理解することを誰も妨げないのである」(XIII,21)。

第19巻は、神の国と地上の国の二つの国の終局について述べられているところであり、節制については「ギリシア語でソーフロシュネーと呼ばれ、ラテン語で節制という名でよばれるところのものである。それによって、肉的な情欲が、精神がそれに同意し、すべての不品行へ引き込むことのないように、抑制されるところの徳のことである」と言われ、賢慮については「賢慮とよばれる徳についてはどうであろうか。それは、善を悪から区別して、善を追求し悪を避けるときにいかなる誤りも忍び入ることがないように、あらゆる用心をはらうのではないだろうか」と言われ、正義については、「正義の務めはそれぞれにその帰すべきものを割り当てることである」と言われ、勇気については、「勇気という名のあの徳は、それを見せる人の知恵がどれほど大きなものであれ、忍耐をもって耐え忍ばねばならない人間的なもろもろの悪についての明々白々な証拠である」と言われる (XIX,4)。しかしここでは、これらの徳が取り上げられ説明がなされているものの、これらの徳を有していることがただちに幸福に結びつくのではなく、わたしたちが希望によって救われているように、わたしたちが幸福にされるのは希望によってであると言われていることに留意する必要がある。

3. アウグスティヌスの枢要徳

3. 1 枢要徳の意味するところ：アウグスティヌスにおいては、初期の作品においても後期の作品においても、四つの枢要徳の意味するところは、大きく変化することなく受け継がれていると言ってよい。賢慮とは善いものとそうでないものを見分けることに関わる知識として位置づけられており、節制とは欲求を抑えることに関わることとして捉えられ、勇気とは試練や困難に耐えていくこととして捉えられ、正義とはそれぞれに対してそれぞれに相応しいものを分け与えるものとして位置づけられており、表現の多少の違いはあるものの、全体として大きな相違があるとは言えない。また、これらの徳は幸福を探求することと密接に関わるものとして、すなわち、魂が至福なる生を希求することから出発してよく生きること、正しく生きingことを求めることの重要性が主張され、幸福な生へと導くものとして徳が捉えられていることについても、初期の作品でも後期の作品でも、基本的には大きく変わることなく受け継がれていると言える。

3. 2 アウグスティヌスへの枢要徳の影響：アウグスティヌスによれば、これらの四つの徳については、『カトリック教会の道徳』においては「それらの徳の名がすべての人の口にのぼるように……」と言われており、『詩編講解』においては「それは多くの作家によって述べられ、聖書においても見出される」とも言われているように、かれ自身、これらの徳がすでに多くの人によって言われていることを認めている。じっさい、『83 問題集』第 31 問題ではキケロの『発想論』における枢要徳が取りあげられている。また、聖書からの引用としては、とくに『知恵の書』8,7 がその典拠となっている。アウグスティヌスへの枢要徳の影響としては、少なくともキケロや聖書があることは否定できない。

ところで、アウグスティヌスの四つの徳の引用をみると、その順序についてはかなり自由であることに気づかされる。たとえば、『カトリック教会の道徳』では節制、勇気、正義、賢慮の順であるが、『自由意思論』では賢慮、勇気、節制、正義の順であり、『創世記逐語注解』では節制、勇気、正義、賢慮の順であるが、『説教』150 では賢慮、正義、節制、勇気の順となっており、この順序にはあまり規則性というものは見られない。このことは、かれがそれらの意味するところを咀嚼しながら、ある一定の自由度を保ちながら使用していることを示しているのではないだろうか。

3. 3 徳と愛：『カトリック教会の道徳』は、古代ギリシアに由来する枢

要徳をキリスト教的な視点から位置づけようとした、ある意味で特異な作品であるとも言える。四つの徳の中で「節制」に多くの紙面が割かれているのは、必ずしも明言されてはいるが、肉の欲望、肉の誘惑を斥け、神への愛に集中していく姿に見られるような、いわゆる「享受と使用」という言葉に示されるかれの「愛の秩序」という捉え方が関係しているとも考えられる。そしてこのことは、やがて『神の国』における「徳について簡潔で真なる定義は、愛の秩序である」(XV,22)という言葉へとつながっていくとも考えられる。

3. 4 枢要徳の重要性：枢要徳は、初期の作品では幸福の生につながる重要な四つの徳として位置づけられているが、後期の作品では一定の重要性を担いつつも、キリスト教的信仰を有していない場合⁷⁾、また、終末における見神という観点からこの世の生を議論する場合⁸⁾には、これらの働きには自ずと限定される側面が生じてくることは否めない。

おわりに

元来はギリシア哲学に淵源を有する枢要徳 (virtutes cardinales) とも呼ばれる四つの徳をアウグスティヌスはその初期の作品である『カトリック教会の道徳』において取り上げた。徳を愛との連関のうちに捉えようとしたことはかれ自身の独創性として捉えることも可能であろう。ただ後期になると、真の幸福、見神の問題が前面に出てくるような来世的視点から枢要徳の重要性が限定される側面が生じてくることは確かである。また信仰の有無ということとの関わりから、いわゆる対神徳と呼ばれる信仰、希望、愛との関係が問題となってくる場面でこれらの徳が取り上げられることもあり、その際には、初期の作品にみられるような重要性が変更をこうむることも否定できないことである (『書簡』 171A,2)。

7) 『ユリアヌス駁論』では信仰を有していない者の徳ということについて論じている。

8) 『創世記逐語注解』『詩編講解』はこれに当てはまる。